

# 日本語のゆれに関する研究

大野 裕佳子

## 1. はじめに

最近、言葉遣いの乱れや、言葉の使い方に疑問を感じることもある。その乱れは若年層を中心に変化を起こしているのではないかと感じた。ら抜き言葉のように学校の授業などで間違いを指摘されるような事例もあれば、人々が使っているうちに徐々にゆれていき、本来の使われ方とは違う形が定着している事例もある。後者は、本来の使われ方とは違うということに人々は気づいていないことが多い。

しかし、最近では、これらの間違いを時間の流れに沿った言語変化とみなし、「乱れ」ではなく「ゆれ」として捉える見方も出てきている。

本論文では、言葉の使われ方の実態を把握し、その使用者の意識を調査する。また、言葉の使われ方や言葉遣いの意識について、若年層を中心に変化を起こしているのかを検証するため、年齢層別に調査し比較する。また、意識調査では、言葉遣いに与える影響についても考察した。

## 2. 調査概要

### 2.1. 調査方法

紙面によるアンケート調査を行う。調査対象とする語は、筆者が言葉の使い方について疑問を感じている言葉、先行研究や文化庁の世論調査で言葉のゆれとして取り上げられた項目を対象とした。

それぞれの言葉について、「聞いたことがあるかないか」、また、「おかしいと感じるのかそうでないか」について問う。聞いたことの有無を問う質問では、その言葉が使われているのかについて明らかにし、おかしいと感じるか否かを問う質問では人々の意識について明らかにする。

また、日頃から特に頻繁に使われている語に関しては、「正しい表現なので使う」「おかしい表現だと知っているが使う」「おかしい表現なので使わない」という選択肢を用意

し、使い方の実態と意識を明らかにする。

調査対象者は10代から80代の男女で、計121名を調査した。これを若年層、中年層、高年層に分け、世代差を見ながら分析していく。

## 2.2. 調査対象者

分析をしやすくするため、年齢を次の年齢層別に区切って分析した。若年層が10～20代、中年層が30～50代、高年層を60歳以上とした。回収したアンケートは121名だった。その中で各年齢層別の人数は、高年層34名、中年層39名、若年層48名である。年齢層別の合計の人数が違うことから、すべてパーセントに値を直し、比較する。

## 3. 調査結果の分析と考察

各設問の調査結果の報告及び、分析と考察をする。

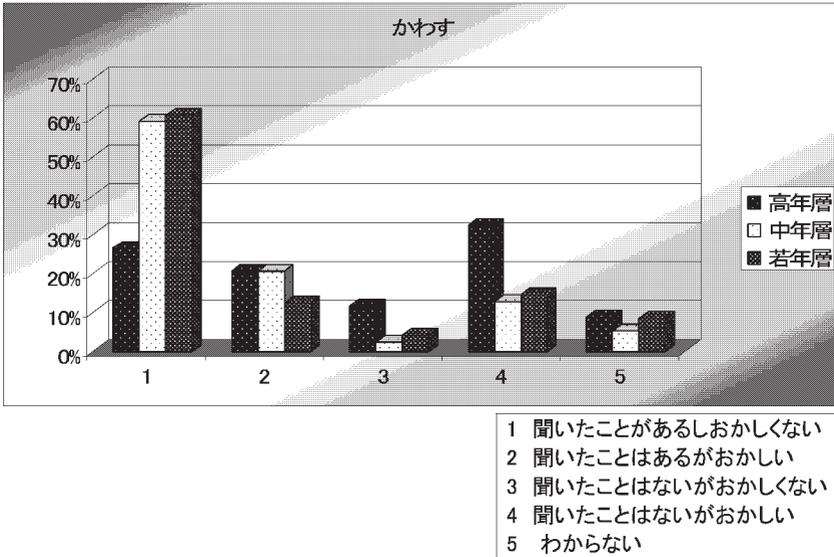
結果の表し方としては、まず全体の選択肢ごとの割合を示し、その後全体での聞いたことがあるかないかに着目し、問題とする表現がどの程度出回っているのかについて分析する。その次に、おかしいかおかしくないかに着目し、世代別に比較していく。

【1】「後方の走者が、先にゆく走者をかわしてトップに立った。」の「かわして」という表現について、あなたはどう思いますかという質問をしたところ、全体では、「聞いたことがあるし、おかしくない」と答えた人が50.4%、「聞いたことはあるが、おかしい」と答えた人が17.4%、「聞いたことはないが、おかしくない」と答えた人が5.8%、「聞いたことはないが、おかしい」と答えた人が19%であった。聞いたことがあるかないかに着目すると、全体で67.8%が「聞いたことがある」と答え、「聞いたことがない」と答えたのは、24.8%であった。おかしいかおかしくないかに着目すると、「おかしい」と答えた人が全体で36.4%、「おかしくない」と答えた人は全体で56.2%で、おかしくないと感じる人の方が多くことがわかった。さらに、年齢層別に表したグラフを以下に示す。

グラフを見ても明らかなように、おかしくないと感じる割合は年齢が若くなるにつれて増える。2の「聞いたことはあるがおかしい」と、4の「聞いたことはないがおかしい」を足すと、おかしいと感じる割合は、高年層が53%と一番高く、中年層と若年層はそれぞれ33.3%と27.1%で、「かわす」という語の認識は高年層と中年層、若年層の間で違いがあるといえる。すなわち中年層、若年層が思う「かわす」の意味と高年層が思う「かわす」の意味は異なるということになる。

『明鏡国語辞典』（初版）によると、この言葉の意味は、

図 1



かわす【躲す】

[1]すばやく体をひるがえして避ける。

[2]攻撃などを避けてのがれる。

とあり、「追い抜く」という意味での記述はない。互いにやり取りをするという意味での「交わす」は別立てであった。

かわす【交わす】

[1]互いにやりとりする。

[2]互いにまじえる。交差させる。

一方で、『新明解国語辞典』（第6版）では、「交わす」のみ立てられており、

かわす【交わす】

[1]やりとりする。

[2]相対する方向から伸びて来た物がそこで重なり合う様子を見せる。

[3]ぶつかりそうになるのを、とっさにかからだの向きを変えたり、からだを片寄せたりして、避ける。

[4]敵の攻撃をうまくそらして、まともに影響を受けないようにする。

表記[3][4]は「<躲す>」とも書く。

と記述されていた。この場合「走者をかわして」の意味は[3]に当てはまり、「追い抜く」という意味を見つけることができた。

このように、言葉の意味の認識が世代によって違うということと、国語辞典によっても見方が異なるということが明らかになった。

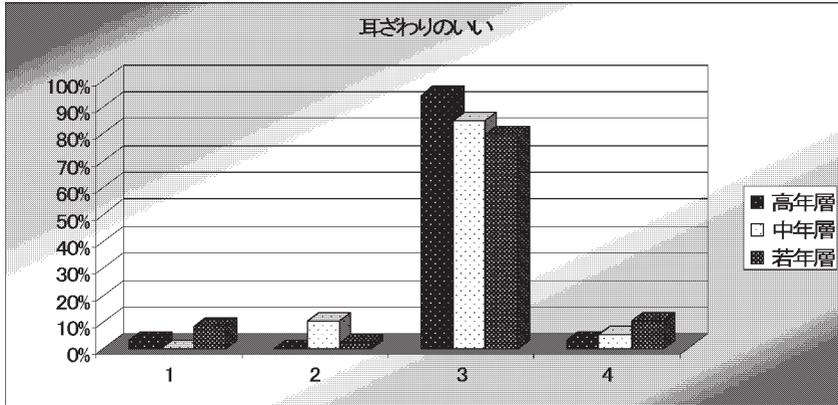
最上（1992）は、この当時の段階で、「『かわす』に新しい意味が加わった」と述べている。これを受けて原田（2001）は、「おかしくない」と答えた人が9年前の調査と比べて50%から65%へと増えたことから、「以前『加わった』新しい意味が、今回は『浸透』した」と述べている。この原田の分析を踏まえ、8年経った今回の調査では「おかしくない」と答える人がさらに増えるのではないかと予測したが、今回の調査では56.2%にとどまった。しかし、この56.2%にとどまった原因は、高年層の「おかしくない」と答えた38.3%が数字を引き下げていることである。中年層、若年層はそれぞれ61.6%、64.6%が「おかしくない」と答えていることから、やはり新しい意味が浸透し続けているのは確かである。10年後には、この表現に違和感を持たない人がさらに増えると筆者は予測する。

**【2】**「耳ざわりのいい音楽」という表現について、あなたはどのように思いますかという質問をしたところ、全体では、「正しい表現なので、使う」と答えた人が4.1%、「おかしい表現だと思うが、使う」と答えた人が4.1%、「おかしい表現なので使わない」と答えた人が85.1%であった。正しいか正しくないかに着目すると、全体で4.1%が正しい表現だと答え、おかしい表現と答えたのは、89.2%であった。また、使うか使わないかに着目すると、使うと答えたのは、全体の8.2%で、使わないと答えたのは、85.1%であった。

年齢層別の比較では、おかしい表現だと感じる人の割合は、高齢層で94.1%、中年層94.9%、若年層81.3%であり、高年層と中年層は、13%ばかり若年層よりおかしいと感じる率が高い。

この「耳ざわり」という表現は漢字に直すと「耳障り」であり、耳に障るという意で、聞いていて不快に感じることを指す。「エアコンの騒音が耳障りだ」のように「耳障りだ」という使い方をすると、不快な様子を表現できる。しかしこの「耳ざわりのいい音楽」をあえて漢字に当てると「耳触りのいい音楽」となる。様々な国語辞典にも、「耳触り」と解し「一がよい」のように使われていることが明記されている。しかし国語辞典においても立場は様々で、『明鏡国語辞典』では「耳ざわりがいい」は誤用と明記しているが、「耳障り」と「耳触り」の両方を立てて、「耳触り」を俗語と断るものもあり、さらには

図 2



- 1 正しい表現なので使う
- 2 おかしい表現だと思うが使う
- 3 おかしい表現なので使わない
- 4 わからない

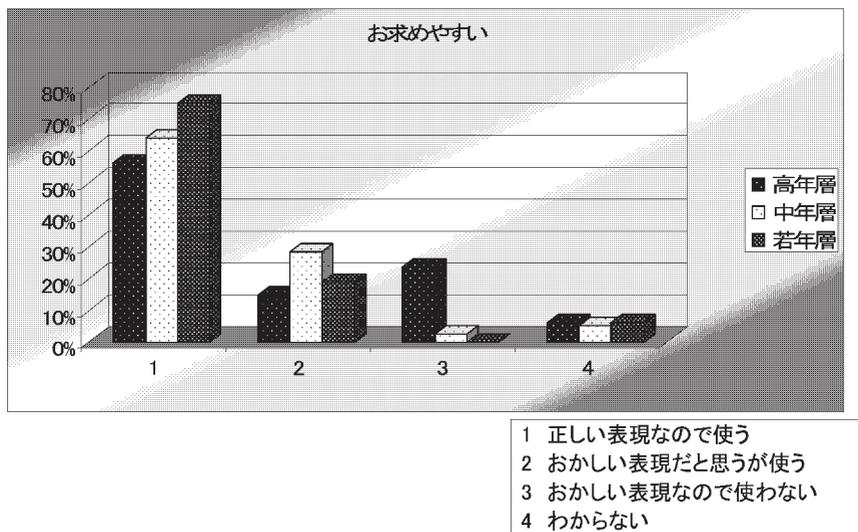
特別な注記もなく、「耳触り」を容認しているものも見かける。小林（2004）も、正誤の判断がゆれている語の一つであると述べている。しかし現時点ではまだ「耳ざわりがいい」という表現は誤用と判断する人が多いということが今回の調査でわかった。

【3】「お求めやすい価格」という表現について、あなたはどのように思いますかという質問をしたところ、全体では、「正しい表現なので、使う」と答えた人が66.1%、「おかしい表現だと思うが、使う」と答えた人が20.7%、「おかしい表現なので使わない」と答えた人が7.4%であった。正しいか正しくないかに着目すると、全体で66.1%が正しい表現だと答え、おかしい表現と答えたのは、28.1%であった。また、使うか使わないかに着目すると、使うと答えたのは、全体の86.8%で、使わないと答えたのは、7.4%であった。

正しい表現と答えたのは、高年層、中年層、若年層でそれぞれ、55.9%、64.1%、75%と、年齢が若くなるにつれ増え、年齢が高いほどおかしい表現と答えた人が増えた。また、高年層と若年層で比較してみると、おかしいと答えた割合は、高年層38.2%、中年層30.8%だったが、そのうちおかしいと思いながらも使う人の割合は高年層14.7%、中年層28.2%であり、高年層の方が中年層より、おかしいと思う表現は使わないという意識が働いているといえる。

目上の人の動作に対して敬意を表す尊敬語では、「お+動詞の連用形+になる」か「動

図 3

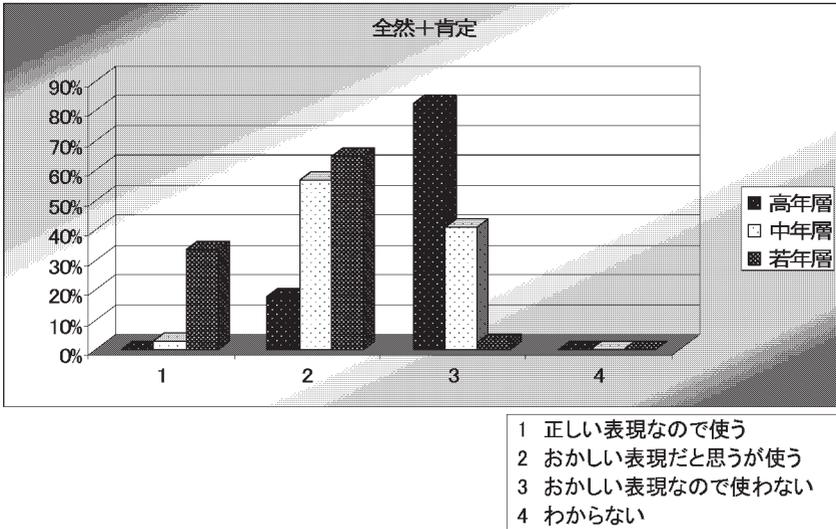


詞の語幹+られる」の2つの言い方が存在する。したがって、この表現を本来の言い方に直すと動詞「求める」に接辞である「やすい」が付いた形であるので、「お求めになる+やすい」で、「お求めになりやすい価格」が適切である。全体で66%が正しい表現と答えていて、さらに80%がこの言葉を使っていることから、あまり抵抗を感じる人は少ないといえる。しかし、高年層では、23.5%が「おかしい表現なので使わない」と答えていることから、高年層は規範意識が高い傾向にあるということがわかった。

【4】「全然いいよ」という表現について、あなたはどのように思いますかという質問をしたところ、全体では、「正しい表現なので、使う」と答えた人が14%、「おかしい表現だと思うが、使う」と答えた人が48.8%、「おかしい表現なので使わない」と答えた人が37.2%であった。正しいか正しくないかに着目すると、全体で14%が正しい表現だと答え、おかしい表現と答えたのは、86%であった。また、使うか使わないかに着目すると、使うと答えたのは、全体の62.8%で、使わないと答えたのは、37.2%であった。

これは最も年齢差が出た表現であるといえる。高年層では、「おかしい表現なので使わない」と答えた人が82.4%と最も多く、全員がおかしい表現であると答えた。中年層になると、「おかしい表現なので使わない」という人が41%、「おかしい表現だと思うが使う」という人が56.4%で、おかしい表現なので使わないという人よりも、おかしい表現

図 4



だと思うが使うと答えた人の方が多くなる。このことから言葉に対する規範意識は中年層よりも高年層の方が高いということがいえる。さらに若年層になると使わない人は2.1%しかなく、この表現が正しい表現であると答えた人が33.3%もいた。正しい表現なので使うと選んだ若年層が33.3%もいるということは筆者も調査をしてみて驚いたことだった。特徴的なことは、若年層の中でもこの選択肢を選んだのは、特に10代からの回答が多かったという点である。若年層は「全然いいよ」という表現を正しい日本語とみなしている人が33.3%いることから、若年層を中心に言語変化が起り始めている語であると考えられる。

ここで問題となるのは、「全然」という語は本来否定語を伴って使う語であるが、ここ最近は肯定表現でも使われるようになってきているということだ。調査結果からもわかる通り、「全然」の肯定文での使用は85%の人がおかしい表現だと答えている。しかし、北原（2004）は、「全然」を肯定表現で使うのは必ずしも間違いではないという考えを示している。「否定的な状況や懸念をくつがえす用法や、二つの物事を比較して使う用法は現在一般化している」と述べている。『明鏡国語辞典』にもこの二つの用法は俗語として記載されている。

松崎（2006）は、「全然」のもつ役割を以下の5つにまとめている。

[1]否定語「～ない」を伴って否定表現をつくる。

まったく。まるっきり。

[2]否定の意味を含む表現（違う、だめなど）を伴って否定表現をつくる。

まったく。まるで。

[3]肯定表現（大丈夫、似合う、いいなど）を伴ってその語を強調する。程度を高める。

もちろん。格別に。断然。

[4]肯定表現（大丈夫、似合う、いいなど）を伴って相手の思いや考え、心配事をくつがえし、相手が思っていることと自分が思っていることの違いを伝える。

とても。

[5]二つのものを比較し、良いと思う方や好きな方を指す。違いを強調する。

断然。絶対に。

このように、「全然」は肯定文でも使うようになってきているという変化が容認されるようになってきている。このことから、「全然」の肯定文での使用はさらに拡大していくのではないと思われる。この「全然」という表現は、今の若年層が高年層になる頃には慣用となり、正式な言葉として認知されるのかもしれない。

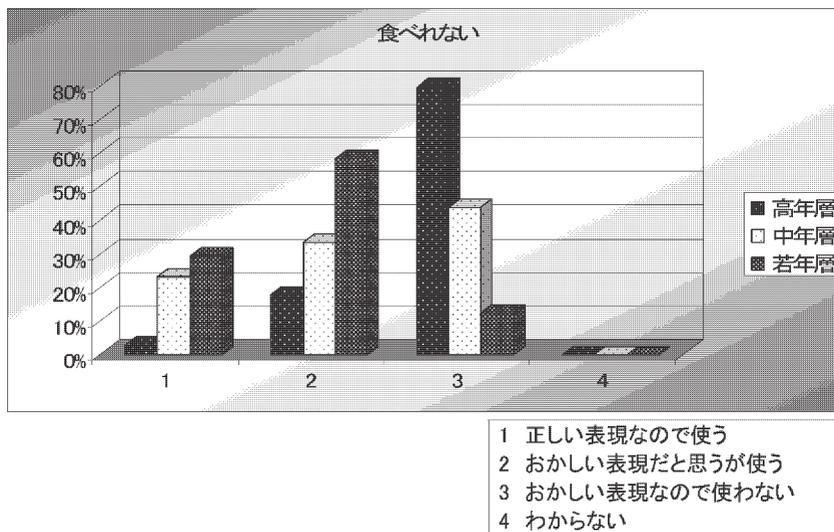
#### 【5】ら抜き言葉

「食べれない」という表現について、あなたはどのように思いますかという質問をしたところ、全体では、「正しい表現なので、使う」と答えた人が19.8%、「おかしい表現だと思うが、使う」と答えた人が38.8%、「おかしい表現なので使わない」と答えた人が41.3%であった。正しいか正しくないかに着目すると、全体で19.8%が正しい表現だと答え、おかしい表現と答えたのは、80.1%であった。また、使うか使わないかに着目すると、使うと答えたのは、全体の58.6%で、使わないと答えたのは、41.3%であった。

高年層では、79.4%の人がおかしい表現なので使わないと答えていて中年層では43.6%、若年層では12.5%となり、年齢が若くなるにつれて、規範的な使い方をしなくなっていることがわかる結果となった。

このことから高年層は他の世代と比べて規範意識が高いということがわかった。中年層では23.1%が、若年層では29.2%が正しい表現だと答えている。つまり、中年層、若年層ではら抜き言葉に対して違和感がないと感じる人も少なくないという結果であった。さらに、この表現を使うと答えた人が中年層では半数以上、若年層では80%以上になることから、中年層、若年層の間でよく使われている表現であるといえる。

図 5



中年層は不適切だと知っていながらも使うという人が多かった。高年層はおかしいと思うし使わないという結果が圧倒的に多く、若年層に限っては正しいと認識しながら使っている人もいた。このように若年層、中年層、高年層で大きな差が出た。

松崎 (2004) は、ら抜き言葉を次のように定義している。

「見る」「起きる」のような上一段活用動詞や「食べる」「寝る」のような下一段活用動詞、「来る」というカ行変格活用動詞の可能表現を表す時に、本来なら「来られる」「見られる」「食べられる」などというべきところを「ら」を抜いて「来れる」「見れる」「食べれる」という表現である。

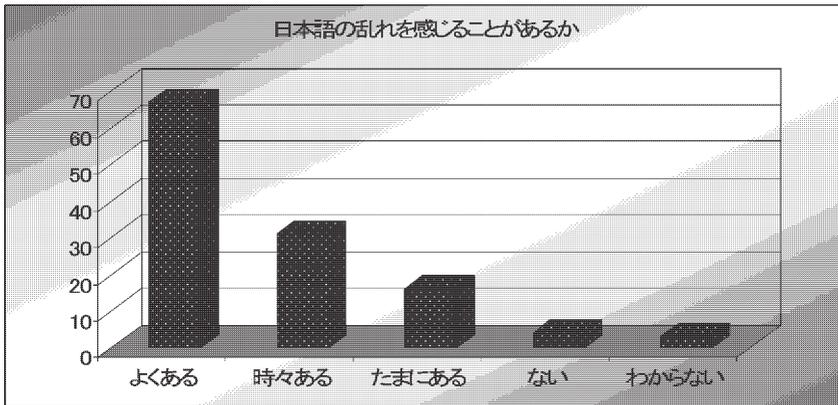
つまり、 possible の言い方をする時に、ら抜きが生じるということである。

庵 (2001) は、「五段動詞「読む」「行く」などに対する可能動詞「読める」「行ける」が前からあったのにくらべ、一段動詞やカ行変格活用に対する可能動詞はずっと新しい形である」と述べている。さらに井上 (1998) は、ら抜き言葉が生じた理由を、「五段動詞と一段動詞の possible の言い方がそろうため、文法の単純化が行われた」と分析している。さらに井上は、「 possible の言い方と、受け身・尊敬の言い方との区別ができるということから、ら抜きが生じた」と述べている。

#### 4. 意識調査の結果と分析

普段の生活の中で、言葉遣いが乱れている（注1）と感じることがあるかどうか尋ねた。よくあると答えた人が67人、時々あると答えた人が31人、たまにあると答えた人が16人、ないと答えた人が4人、わからないと答えた人が3人であった。この中で、よくある、時々ある、たまにある、を答えた人の合計は、121人中114人で、94%もの人が日々の生活で日本語の乱れを感じているという結果となった。

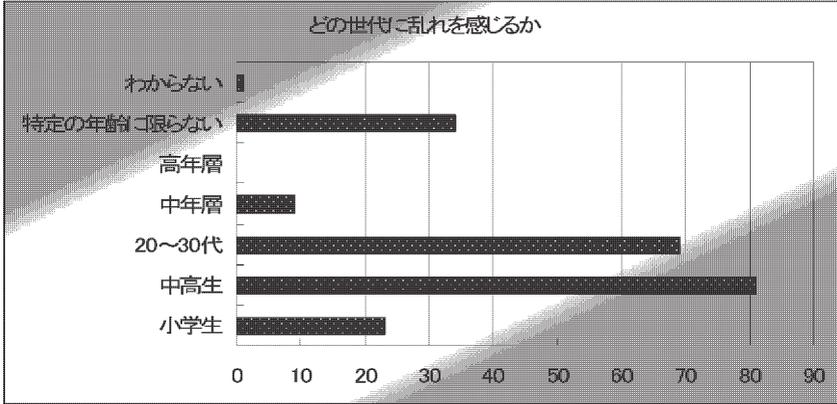
図 6



言葉遣いが乱れていると感じることがあると答えた人に、どんな時に乱れていると感じるかを質問したところ、「ものの言い方が乱暴な時」と答えた人が49人、「テレビを見ている時」が77人、「友人と話している時」が45人、「敬語を間違えて使っている時」が63人であった。（複数回答可）

また、どの世代の言葉遣いに乱れを感じるかという質問では、「小学生」と答えた人が23人、「中学生」と答えた人が81人、「20～30代の若者」と答えた人が69人、「中年層」と答えた人が9人、「高年層」と答えた人が0人、「特定の年齢に限らない」と答えた人が34人であった。「中学生や高校生」と答えた人が37%、「20～30代の若者」と答えた人が32%で、やはり、予想通り若年層を選んだ人の割合が高い。「高年層が乱れている」と答えた人は一人もおらず、「中年層が乱れている」と感じる人は9人いた。この9人は全員高齢層からの回答だった。すなわち、中年層の言葉遣いが乱れていると感じる人は高齢層のみで、中年層は自分たちの言葉遣いは乱れていないと認識している。「特定の年齢に限らず乱れている」と答えた人は、34人だった。

図 7



自分自身の話した言葉遣いについて周りの人から注意を受けたことがあるかの質問では、「よくある」と答えた人28人、「時々ある」と答えた人が15人、「たまにある」と答えた人が25人、「ない」と答えた人が38人、「わからない」と答えた人が9人だった。「よくある」と答えたのは高年層1人、中年層1人なのに対し、若年層は26人いた。頻度に係わらず、あると答えた人の合計は高年層12人、中年層33人、若年層32人だった。さらにないと答えた人は、高年層17人、中年層21人なのに対し若年層は0人だった。ここで明らかになったことは、自分の言葉遣いに対し、注意を受けたことがあるという人は若年層が多いということだ。さらに、アンケートでは、言われなくても自分で気づくと回答した人もいた。

また、この注意は誰から受けたかという質問では、高年層では友人から注意を受けたという人が最も多く、中年層では、夫や妻または自分の子どもから注意を受けたという人が多かった。中年層は家族から注意をされることが多いということがわかった。若年層では、父親に注意を受けた人は18人、母親に注意を受けた人は21人、先生からが10人、友人からが15人と様々な人から注意を受けたことがあるようだ。中にはアルバイト先の先輩や、店長などから注意を受けたという人も5人いた。注意を受けた時に自分の間違いを自覚したかどうかの質問では、自覚したという人が51人、自覚していないという人が4人、わからない人が6人だった。ほとんどの人が自分の間違いについて自覚したと答える中、自覚しなかったと答えたのは、高年層1人、中年層2人、若年層2人がいた。言葉遣いに与える影響が大きい人やものについて9つの選択肢から選んでもらった結果

は、次の通りだった(複数回答可)。この結果から、言葉遣いに一番影響を及ぼすものは、母親という存在であった。次いで父親が2番目に多かった。やはり言葉のしつけをされることが多いため、母親と父親の影響は大きいはずだ。その次に多かったのがテレビだ。最近では年末になるとその年に流行った流行語大賞の発表が行われるが、その候補として挙がるものは、有名タレントの口癖やお笑いネタなどで使われる語が入ることが多い。このように芸能人が発する言葉はテレビという媒介を通して様々な世代の耳に届くので、言葉遣いに対するテレビの影響はかなり大きいといえる。この他の回答では本から与える影響が強いと答えた人もいた。この結果を見てみても、親の存在は言葉にとっても大きいということがわかった。

## 5. まとめ

以上の結果を踏まえて、全体的に明らかになったことを述べる。仮説の通り、日本語の使い方には、世代差が認められた。若年層は、ゆれている語に対してあまり抵抗がないように感じとれる結果となった。一方で、高年層では本来の言葉の使い方を守りたいという考えの人が多く、言葉の変化を認めないという回答が多かったため、若年層と高年層では大きな差がついた。中年層においては、若年層と高年層に挟まれ、両者からの影響もあるのか、ほぼ若年層と高年層の間という結果であった。以下に年齢層別の特徴を述べる。

### 【若年層の特徴】

- ・ ゆれている語に対して、「正しい表現」として認識している人が多い。
- ・ ゆれている語に対し、「使う」と答えた人が多い。
- ・ 「おかしい」と認識していながらも、その言葉を使っている割合が高い。

### 【中年層の特徴】

- ・ ゆれている語に対して、「正しい表現」として認識している人は、若年層より少なく、高年層より多い。
- ・ 「おかしい」と認識していながらも、その言葉を使っている割合は、高年層より高い。

### 【高年層の特徴】

- ・ ゆれている語に対して、「正しい表現」と認識する人は少ない。
- ・ 「おかしい」と認識する表現は使わない人が多い。
- ・ 本来の日本語に対して、「懐かしい」「守りたい」と思う人が多い。

これらの特徴をまとめると、

- ① 日本語の使い方には世代差がある。
- ② 若年層を中心に言葉の変化が起こっている。
- ③ 年齢が高くなるにつれて日本語の規範意識が高くなる。

ということが明らかになった。

さらに、研究を進めてきてわかったことは、言葉を誤用と判断するか、容認するかという点については、国語辞典によっても様々な見方があるということだ。国語辞典では、言葉を、「誤用」とみなすか、「俗語」とみなすか、「適切な表現」とみなすかという3つの立場が存在するという事もわかった。

倉島（1995 p.35）は次のように述べている。

辞書の編集には、言葉の実態があるがままにとらえて記述的態度で編集する立場と、言葉の正しい解釈・用法を示すことを第一の目的として規範的態度で編集する立場がある。

つまり国語辞典を編集する立場からしても、言葉の変化に対し、変化を受け入れ今現在話されている言葉を残そうという記述的態度と、日本語本来の使い方が正しいとする規範的態度での葛藤があるということだろう。

今回分析するにあたって、様々な国語辞典を手にとったが、辞典によっては様々な立場での記述を見かけることができたと同時に、この様々な立場での記述は、私たちが使う言葉が左右させているのだということにも気付いた。私たちが日本語の使い方にも少し気を配って、本来の使い方を守ろうとする意識が働けば、誤用や俗語を増やさないようにできるだろう。反対に、言葉は変化するものだと言い切り、変化する言葉を容認し続ければ、やがて全世代に慣行が行き渡り、いずれは当たり前表現と変わっていくのだろう。

磯部（2006）は、

「誤用」として扱われるもののなかには、明らかな文法的な間違いや誤解に基づくものもあるが、その一方で、歴史的变化の途上における「ゆれ」と考えるべきものも少なくないのである。歴史を遡ると、たしかに明らかな誤用であるが、現在では規範としては未だに認められていないものの、実際には広く使用されており、ある程度市民権を獲得しているかに見える表現は少なくない。これらは、将来的には、規範としても完全に認知されるであろう。

と述べている。

このように、言葉は、長い年月をかけて変化していくのが特質であり、その変化の途

中で、「ゆれ」は必然的に起こるものである。

## 6. おわりに

本稿では、日本語のゆれについて人々の意識と使い方の実態について世代別に分析してきた。日本語の使い方には、世代差が認められ、若年層は、日本語の変化にあまり抵抗がなく、年齢が高くなるにつれ日本語の規範意識が高くなるという特徴が分かった。世代別の特徴を見つけるだけでなく、辞書によっても見方が異なるという点も意識できた。

今後の課題としては、より正確な使用実態を調査するために面接式を行うということと、世代ではなく年代ごとに分け、より細かなデータを収集することである。

さらに、今後どのように日本語が変化していくのか、また人々の意思に変化があるのかについて継続的な研究がなされることを願いたい。

## 注

1. インフォーマントに分かりやすくするために、アンケート調査では、「ゆれ」を「乱れ」という表現にしている。

## 参考文献

- 庵功雄（2001）『新しい日本語学入門ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 磯部佳宏（2006）「変化する日本語—「誤用」と「ゆれ」—(上)」『山口大学文学会誌』2006, 56 pp.63-70 山口大学文学会
- 市川孝（2004）『三省堂現代新国語辞典 第二版』三省堂
- 井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波新書
- 岩淵悦太（1990）『言葉を考える：日本語を動かすものは何か』創拓社
- 片山朝雄（1983）『ゆれ動く言葉と新聞』南雲堂
- 加藤迪男（2001）『20世紀のことばの年表』東京堂出版
- 北原保雄（2002）『明鏡国語辞典 初版』大修館書店
- 北原保雄（2004）『問題な日本語—どこがおかしい？何がおかしい？—』大修館書店
- 倉島節尚（1995）『辞書は生きている—国語辞典の最前線—』ほるぷ出版
- 見坊豪紀（2001）『三省堂国語辞典 第五版』三省堂
- 真田信治（1983）『日本語のゆれ：地図で見る地域語の生態』南雲堂

- 塩田雄大 (2001) 「あなたはブタジル? トンジル? ~平成12年度ことばのゆれ全国調査から②  
 ~」『放送研究と調査』2001, 3 pp.68-89 NHK 放送文化研究所
- 篠崎晃一・神田龍之介 (2008) 『揺れる日本語どっち? 辞典』小学館
- 柴田実・深草耕太郎 (2000) 「耳ざわりがよいは耳障りか~第10回事ことばのゆれ全国調査から  
 ~」『放送研究と調査』2000, 2 pp.32-45 NHK 放送文化研究所
- 清水義範 (2001) 『日本語の乱れ』集英社
- 田中春美・田中幸子 (1996) 『社会言語学への招待—社会・文化・コミュニケーション—』ミネ  
 ルヴァ書房
- 田中浩史・山下洋子「放送で使われる敬語と視聴者の意識—平成20年度「ことばのゆれ」全国調  
 査から—」『放送研究と調査』2009, 6 pp.50-70 NHK 放送文化研究所
- 原田邦博 (2001) 「同じ年なら「同級生」? ~平成12年度ことばのゆれ全国調査から①~」『放送  
 研究と調査』2001, 2 pp.42-53 NHK 放送文化研究所
- 平山輝男 (1996) 『平山輝夫博士米寿記念論集』明治書院
- 松崎優 (2006) 「日本語の乱れ意識に関する調査研究—「ら抜きことば」「あげる・やる」「全然」  
 —」東京女子大学・現代文化学部卒業論文
- 最上勝也 (1992) 「ことばは「おもむろに」変化する~語感連想による語義変化について~」『放  
 送研究と調査』1992, 7 pp.46-53 NHK 放送文化研究所
- 山田忠雄 (2005) 『新明解国語辞典 第六版』三省堂

#### 参考資料

文化庁 平成12年度「国語に関する世論調査」の結果について

([http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/yorontyousa/h12/kekka.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yorontyousa/h12/kekka.html))

#### Abstract

Spoken language shows variation and people often call the variation 'language disorder' in that it contains deviations from the 'standard' forms. However, these linguistic deviations come to be regarded as appropriate as people use them.

This paper focuses on the variation and disorder of Japanese. I investigated the actual condition of Japanese and the consciousness of the language among users. The purpose of this study is to demonstrate whether there are any differences between generations.

I chose some words and asked the following questions: "Have you heard the words or not", "Do you think the words are proper or not", and "Do you use the words or not". I demonstrated the actual condition of the words and the feeling about the words by the

following questions. I gave a questionnaire to 121 informants, and I divided the informants into three groups: 1) elderly participants, 2) middle-aged participants, and 3) young participants. In my research, I analyzed the specific characteristics of these three groups.

It was found that the young people are more adaptable to linguistic change than the middle-aged and elderly participants. This study discovered that the elderly tend to obey the prescriptive grammar.